

## 平成30年度 北海道小学校校長会地区活性化支援事業【実践事例レポート】

- 1 報告地区：日高地区
- 2 事例報告学校名：日高町立厚賀小学校
- 3 報告者：校長 上野信仁
- 4 キーワード：学校統合に向けての社会性の育成

### 1 はじめに

前任校の日高町立里平小学校が閉校となり、その統合先となる本校に平成30年春に、校長として着任した。統合への2年間にわたる取組を報告する。

前任校は中山間の極小複式校で、全校児童6人であった。平成7年から、地域・自治会を中心にして山村留学に学校存続の活路を求めて、推進してきたが、平成28年度中に、平成30年3月をもって閉校が決定となった。里平小学校から、一番近いコンビニエンスストアまで25 km、校区内には商店はない。近隣の学校は、平成20年前後に、既に統廃合し、近隣地域一帯の戸数減、人口減、少子高齢化に拍車がかかっている状況であった。

地域は、経済的に安定した畜産・酪農・稲作・畑作が盛んで、落ち着いた学習環境が整い、学力問題・生徒指導上の問題はないと言っても過言ではなかった。学校は、山村留学を進めるだけでなく、小さな集落の中心としても位置付けられ、地域住民が集う貴重な場所でもあった。そのため、子どもたちが大人と触れ合う機会は多かった（写真下）。

ただ、市街地校と比較すると、社会性や思いやり、協調、メタ認知については更に伸ばすことが必要であった。統合に向けて、社会性の育成を重点課題とした。



### 2 合意形成

28年度の早い時期に統合の方針が町教委より示されたので、27年度末に前任校長が設定した教育の重点目標を多少シフトし、対応した。学力や生徒指導、生活リズムの指導には大きな課題はないが、社会性については、教科をはじめ道徳、学校行事等の特別活動と全ての領域において育成という視点から見直したのである。

### 3 教科・道徳

ほぼ学年に児童1人の学級編制であったが、以下のことを配慮して授業改善を図った。

- ・標準規模（多くの聞き手）を想定しての発表。  
（黒板、ポスター、画面を指し示しながら、視線、声の大きさ等の指導）

- ・多様に考える、教師も含め議論する授業づくりの推進。
- ・職員室の教員以外の職員に説明する機会の拡充（職員室に来室、教室に招待）。
- ・見学学習では、外部の人に直接関わる場面を意図的に設定。
- ・道徳で「おもいやり」「寛容」についての学習。

#### 4 特別活動及び総合的な学習の時間

主に豊かな社会性を育むため、

- ・教室では1、2人なので、全校児童、教職員、時には保護者・地域の皆さん等、多人数の前でひとりで発表する機会の拡充とその事前指導。
- ・図書館訪問、スキー学習でより多くの大人と関わるように、子どもの活動を見守る機会の拡充。
- ・土曜授業で外部人材の活用を図り、岸田天大さん（写真右）や琴の指導、指導主事による実験教室等を行い、個性豊かな人材との出会いの場を設定。
- ・社会教育から職員を派遣してもらい、バドミントン教室を数回開催し、体力づくりと兼ねて、指導者との触れ合いも推進。
- ・閉校式典とその後の交流会では、200名程の参加者があり、その大人数の前でも発表できるよう出番を確保。また、人に迷惑をかけないマナーの指導。
- ・業者等の来校者への自己紹介の場の設定。



なお、山村留学生でもあるたったひとりの6年生が、リーダーシップを十分発揮して、率先して活動し、社会性を育むための良いお手本となってくれた。

#### 5 統合に向けての合同学習の充実

以前から統合校とは児童の交流があったが、統合後、円滑に学校生活を送ることができるように、更に合同学習等の充実を図った。

- ・統合校の全校集会や授業に参加する機会や時間を増やした。全校集会では、出店集会の準備からそれぞれの学年に入り、一緒に活動した。
- ・自校に低学年全員を招き、全校児童6人と、裏山散策・栗拾いを実施した。
- ・両校の全校児童で歩くスキーやソリ、ゲームで冬の里平の雪を楽しんだ。（写真右）



#### 6 まとめ

統合先である厚賀小での教育活動が、半年ばかりが過ぎた。これまでの統合までの取組の成果をまとめてみる。この2年間の取組が功を奏し、子どもたちは、スムーズに集団に溶け込み、それぞれの個性を発揮して新しい環境で日常を過ごしている。全体的には、大きな課題はなく円滑に統合を乗り切ったと言っていいだろう。しかし、一部、人と人との有機的な繋がりが進むにつれて、新たな課題も発生してきた。それは、学級経営の充実で対応している。